
Re:Act—創造者な俺の異世界記録—

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re: Act―創造者な俺の異世界記録―

【Nコード】

N9265Y

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

異世界？フィアデルフィア？に召喚された瀧沢志紀は、元居た世界に戻る為に世界改変を頼まれた――と言うのも今は昔。帰れない。それが分かった瞬間、彼の長い旅は幕を閉じた。半ば自暴自棄になりつつ彼は自分の都合の良い居場所を作る為に領土会得を決意する。そして現在、？黒獅白鷲戦争？で駆り出された彼はその戦争にて名を馳せ、領土を会得。侯爵としての地位を得た彼はシャンカティア半島に屋敷の設立を決意した。彼の力は神の力。戦争では鬼神の如く戦い抜き、彼に付いた称号は『黒獅子』――。そんなある時、再

び神より連絡が入る『世界を完全改変して欲しい』と――（主人公最強系物語です。生々しい性描写や残酷な描写が含まれます。苦手な方は即座にバックブラウザ。不定期更新。そしてこの作品は『死ねない俺』の物語の世界の並行世界で展開されます故、すれ違いかもしれませんか。それではどうぞ

登場人物紹介（随時更新）

称号：『ルシア黒獅子』

名前：瀧沢志紀 | Shiki Takizawa |

通称：『クリエイター創造者』

性別：男性

年齢：19

地位：侯爵

身長：172cm / 55kg

体質：『リアレクト・コンデンツ幼女好寄体質』

容姿：黒髪黒眼黒縁眼鏡に整った顔立ちをしている

能力

デイドリーム・クリエイター

『創造具現者』

エアスベア・イグジラント

『時空転移』

宝具

アンリミテッド・エラキライザー

『無限器製』

ルル・ブレイカー

『破戒全符』

バラダイス・オブ・エデン

『歡喜樂園』

イーヴァ・ゲングニル

『巫女予言』

マスタート・オブ・サーヴァント

『主従関係』

ドヴィアク・ミヨッルニル

『穿砕死撃』

シーヴァ・トリシユラー

『破壊戟槍』

禁具

レーヴァ・ティン

『害成魔杖』

性格

年下の女性に何故か好かれる悲しき体質の持ち主な語り部。女顔、女みたいと言う『女』をコンプレックスとしている。温厚で人当たりの良い人物。無駄に女性から惚れられる為に、周囲からの視線が痛々しい。

優しさ故か、温過ぎるとも言われ、それでもやる時はやる男である。戦争で名を馳せた人物で今も猶有名人。運動神経、頭脳共に良い。変態鬼畜のドＳスケベ馬鹿と酷いまでな言われように『否定出来ない』と言う男。

大事な物、大切な存在の為なら国一つ潰せると言う。

過去に謎の人物と出会い得た能力が『創造具現化』でもあり、その謎の人物を追っているのだが情報が零の為、手出しが出来ないと言う。

この世界に来てから特技で『ヴァイオリン』と『ピアノ』が増えた
と良い、無理矢理覚えさせられたと言う。

怒らせてはならぬ人物ナンバーワンで、普段からは考えられない台詞が飛び出す。

肉体スペックとしては並々程度の運動神経を供え持つ。特攻隊として活躍した為に、腕は相当だと言う。

最年少特攻記録を所持し、僅か17歳の頃に幾多物戦渦を潜り抜けている。

保有能力は二つだが、創造具現者により宝具を作ってしまう為、無駄に宝具の多い男である。

故に『黒獅子』の名の他に多くの宝具を持つ『財王』とも呼ばれる。不死身躯の影響で19歳以上既に年齢は取るが、若々しいままなので女性から恨みを良く買う。

酸素を吸うように、また吐く様にフラグを立てる為に、回収に疲労困憊と言う。

称号：『ディヴィオ・ゴッデス戦女神』

名前：鹿野三咲 | M i s a k i K a n o |

性別：女性

年齢：不明

通称：『ジャンヌダルク戦勝利者』

地位：不明

身長：不明

体質：不明

容姿：藍色の瞳に藍色のポニーテールに軽装。美少女の類にカテゴライズされる顔立ち。

能力

ヴァルキュレイト・ワルキュレ
『戦場死体』

宝具

ブリュンヒルデ
『勝利導誘剣』
エオルグ・スケルグ
『戦司軍神』
ゲイル・スケルグ
『槍戦軍勢』
ガーデイス・ヘルヴォル
『軍勢守護』
ジャヴァント・フリスト
『轟唸援軍』
スケツギオールド
『武斧時代』

性格

能力名を嫌う次なる勇者。

現在時点としては完全覚醒はしていないが、その能力は数多の宝具を備える者。

志紀以上に宝具を納めているが、それを全部一斉に使う事は出来ない。

撫でられる事が好きで、男っぽい威厳を持った口調の持ち主だが、実際恐怖に打ち勝つ為に強がっているだけである。

気高く、孤高の存在に見得るかも知れないが、それも強がっているだけで、それが原因で事件に巻き込まれる事もたびたび。

一番彼等の中で人間性のある女性で、年齢不詳の為分からないらしい。

運動神経は抜群だが、脳筋。故に戦女神と名付けられた存在。

優二や志紀とは違い、戦を必死に止めようと、人が死ぬのは殺すのは嫌と告げている。

戦女神とは表の面、実際は脆弱で、精神面も脆い。毎日恐怖や人の悲鳴にうなされると言う。

称号：『デヴィオ・レーゼ死音奏者』

名前：南雲優二「Yuzi Nagumo」

性別：女性

年齢：不明

通称：『武帝』

地位：元王

身長：不明

体質：不明

容姿：金色の髪に黒い瞳の持ち主、整った顔立ちの持ち主

能力

ヒロイック・ウェポンリズム
『英霊武装』

宝具

ディエール・レールガン
『超伝導次元電磁砲』

エディア・キルド・カオス
『百鬼輪廻八王刀』

ゲイ・ボルグ
『刺穿死棘槍』

ザ・ブリューナク
『轟閃貫者』

ペーフェニクス・アンサンズム
『不老不死』

王具

エクス・カリバー
『勝利栄光剣』

性格

神様曰く、6年前に召喚した一人で、魔王を打ち倒した英雄にして勇者。

志紀が『財王』ならば、優二は『武王』らしく、性格も似たり寄ったりだと言う。

能力が武器を作り出す能力。

天才的武装センスの持ち主で、それこそ6つの武器を全て身に纏う事も出来る

持つ宝具は全て神の持つ武器、英雄の持つ武器等であり、自己創造の武器も有ると言う。

不老不死と言うより、自分で納得の行く答えが見つからぬ限り死ねない歳を取らない能力も付属した為、現在行方不明でも生きている事には違いないらしい。

名前：エリシアⅡオーキッドムーヴ

年齢：17

性別：女性

地位：メイド長

身長：156cm / 不詳

体質：『特に無し』

属性：ツンデレ

種族：『人間』
ヒュニム

容姿：紫混じりに銀色の髪に、淡い藍色の瞳をした美少女。

魔法

バーフェティア・エールティーズロ

『絶対零度』

ヴィアンテ・オルヴァティベクスエロ

『疾風嵐諷』

性格

情熱的な部分もあれば冷静な部分もあると言う対象な人間。

一種のツンデレで、寂しがり屋の甘えん坊。

口調が時折痛々しい毒舌の場合もあり、志紀は幾度がそれに潰されている。

二人きりの場合はシキ様と呼ぶも、皆の前ではご主人様としか呼ばない。

ツッコミ役として稼動し、氷と風の魔法を自在に操る。

元々奴隷だった所を志紀に拾われたのが始まり。

撫でられるのが好きで、甘味料を好む。

炊事洗濯裁縫まで出来るが、料理人たちにそれは任せていると言う。愛称としては『エリイ』と呼ばれ、慕われている。母親的存在で、嫉妬深い。

怒ると背後に阿修羅が現れると言う。因みに志紀曰く「阿修羅を超

えた場合は制御不能」らしい。

名前：クレアーティア・フォームント

年齢：18歳

性別：女性

職業：料理長

通称：『クレア』

種族：『妖精』
エルフ

属性：ツンデレ

容姿：淡い緑色の髪に碧眼の持ち主。無論、耳は長い

魔法：『紅蓮虚炎』
エリオロツソ・ホリアライズ

『恵震大地』
クエイズ・エアリローグ

性格：火炎と大地の魔法を使用する料理長。

エリシア以上のツンデレの持ち主の妖精族。

妖精の里を出た直後、妖精の里の崩落を聞き、志紀に引き取られた。アキ』と呼ばれ慕われつつ、押し退けてしまう自分が嫌いだと言う。料理に関しては天才的ながら、実質馬鹿。運動神経も相当ある。

エリシア同様二人きりの時は甘えん坊克抱着魔だが、他が居た場合押し退けてしまう。

耳と首を弱点とし、それを知っているのが志紀だけと言う状況。しかしどんな性格でもボーイッシュで大雑把なのがやはり一番だろう。

名前：神様

年齢：不明

性別：女性

職業：第零番零式創造神

通称：『みいちゃん』

容姿：淡い青色の長い髪に藍色の瞳の持ち主。

能力：『ギヴァン・ア・リハト・スキニツシオ受渡吐飲』

性格：

志紀に能力を授け与え、神様にならないかと尋ねた張本人。神様ながら携帯をつかいこなし、優しい為馬鹿にされ易い。自称『最強』克『優秀』。

志紀唯一の情報提供者。

名前：リナリーⅡエプレンドウール

年齢：17歳

性別：女性

職業：研究者

種族：『人』

属性：無し

通称：『リナ』

容姿：淡い水色の髪に水色の瞳を持つ。

魔法：『エニイル・リカーバル邪傷治癒』

『アクターレ・フリッツ閃雷撃攻』

性格

特にツンデレやヤンデレなどと言う属性を持たない女性。

公明快活克温厚で、人当たりの良い人物だが、研究を馬鹿にする者は許さない女性。

研究を認め、それに協力すると言ってくれた志紀を大事に思っているが、それは表には出さない。

研究者だが、志紀にメイド兼研究者はどうだ？と誘われ合致した。雷と治癒系統の魔法を得ており、一度志紀を焼き殺そうとした事があつたらしい。

頭が良く、説明の補佐役で、どちらかと言えば前衛の役割を果たす。

名前：フィアレクスⅡミーティア

年齢：14歳

性別：女性

職業：学生

種族：『アニシア獣人』

属性：デレデレ

通称：『ファイア』

容姿：灰色染みた藍色の長い髪に銀に近い青色の瞳の持ち主。

魔法：『インテルファイア・ナティエリア自然干涉』

『コイル・ア・サモン召喚』

性格：

過去に里を滅ぼされた獣人族の生き残りにして元盗賊。

召喚獣使いでその力は一級品。

獣人族で、一度志紀と戦ったが歯も立たず敗北する。

盗賊として活動していたが、とある事件に巻き込まれ、人生を棒に振りかけた。

甘えん坊で、撫でられる事を好む。耳と尾を猫同様弱点とし、志紀以外に触れられる事を嫌う。

運動神経は抜群だが、何処か抜けている為、馬鹿と呼ばれる事もある。

名前：マルドゥエディックディア

年齢：50歳

性別：男性

職業：門番克庭師

種族：『ディーゴン龍人』

通称：『ザイツ』

魔法：『特に無し』

庭術：『三段本式』

性別：志紀に雇われた庭師克門番を務める男。

当代最強の剣士として有名だったが今では老いぼれの為誰も雇って

はくれなかった。

未だに腕は衰えておらず、その腕は志紀すら気を抜けば危険な程。
温厚克人当たり良い人物で、武器の製造も可能。

志紀の唯一の支え人でもある。

名前：イデアⅡリンスカットフォルド

年齢：17歳

性別：女性

職業：剣士

通称：『リン』

種族：『人間』

容姿：クリーム色の金髪で藍色の瞳を持っている

魔法：『特に無し』

剣術：『帝国流剣術』

『我流連式剣術』

性格：直情型馬鹿。志紀に弟子にしてくれる様に頼むが悉く断られている存在。

案外泣き脆く、脆弱。剣術一式を使用するも、何度も敗北の苦渋を味わっている。

リンスカットフォルド家と呼ばれる『伯爵家』の跡取り娘だったらしいが、現在逃亡中。

自分を一人の「女」として見てくれる人物を探していたと言う。

M体質持ちなのかどうなのか分からないが、志紀に罵倒されると頬を染める一面が見られる。

イデアの父である『アークⅡエルグラスⅡリンスカットフォルド』には女では無く『道具』と見られているらしい。

魔力才能が無いのか、魔法は一切使えない。

登場用語紹介（随時更新）

ⅡファイアデルファイアⅡ

本作の舞台となる異世界。

魔力が主力の世界で、科学技術は一切存在しない。

五つの大陸より構成されており、

？東方国家群

？西方国家群

？北方国家群

？南方国家群

？中央国家群

と言つ具合に別れ、成り立っている。

中央国家群は主に『国家群の中でも主力国家の王、或いは皇帝達による会議』を行う為の場所であり、機関。

フロ・エンペシアシステム

『護帝機関』と呼ばれるそれぞれの国家の様子を見守る国家主力最強主も存在するが、滅多に顔を出す事は無い。

ルシア・オブ・ウオーヴ・エクティアーヴ

Ⅱ軍神使用禁止令Ⅱ

ルシア

軍神と呼ばれる軍を司る戦の神の召喚を禁止する条約。

止む終えない場合は中央国家群の王に頼み、許可を出す事によって使用許可が出される。

例えるならば軍神にも種類があり、炎を司る軍神、龍型軍神などで使用方法が異なる。

召喚する存在が強大であれば強大である程、使用許可は出難い。

Ⅱエクトリアス帝国Ⅱ

東方国家群西部を支配する強大なる軍事国家。

覇権主義を掲げた帝国で、東方国家群完全統一に乗り出す。

魔法技術、軍事兵器技術技術関係どれに置いても最優秀である。

「アーククライズ王国」

東方国家群南部を支配する覇権主義国家。
豊かな農地と水流を得た為、水産業と農業が主力となっている。
西をエクトリアス、北をカメルディアに挟まれており、戦乱が耐えない。

実質軍事関係に置いてはエクトリアスに一步譲るも、策では勝るとも劣らずだと言う。

城壁は最新鋭の対魔物避け結界が張り巡らされている。

「カメルディア王国」

東方国家群北部に位置する自然国家。

周囲を樹林、砂漠に囲まれており、魔物の侵入を避ける為に魔物避け結界を張っている。

しかし樹林、砂漠が有る為に農業については困らず、水産業についてもアーククライズより輸入する時があるので困らないと言う。

豊富に産出される貴金属非金属を輸出しており、その中でも鉄鉱石の産出量は東方国家群一である。

「トリエニスタ皇国」

東方国家群最北部を支配する覇権主義国家。

エクトリアス帝国とは現在冷戦状態であり、諸国家群と同盟を築いており、完全支配を目論む。

『ディアック同盟』と呼ばれる『戦争時には協力する代わりに、食糧や物資を諸国家に提供する』と言う同盟を結んでいる。

シャンカティア半島の国王は志紀と親しい仲でもあり、協力し合っている一面も見られる。

「エスカンティア王国」

東方国家群東部に位置する最後の覇権主義国家。

実際其処まで覇権主義争いには入ろうとはせず、隙を窺っている。周囲には峻険な山々が聳えている為、国に来るだけでも容易では無い。

天然の防壁とでも言う様に雪が山頂に積もる為、雪崩が良く巻き起こる。

東方国家群中央部への侵略を目論んでいる。

〓 シャンカティア半島 〓

東方国家群の中でも最東部に位置する無法区域。

森林地帯で、魔物が多数出現し、危険区域として指定されている。

現在の志紀の領地で志紀の屋敷の存在する区域。

魔物は皆志紀の手によって一層された。

〓 魔力 〓

ファイアデルフィアの主力動力。

魔力による兵器操作や、魔力による魔物避け専用結界。

或いは空を舞う舟？飛空艇？の動力源、空を舞うバイク？空舞車？
の動力源としても使用される。

炎を起こす程度ならば魔石と呼ばれる魔力の秘められた結晶を使用すれば良いが、電力水力問題はまた違う。

電力は巨大な魔水晶と呼ばれる魔石の上に存在する莫大な魔力を保持する結晶を使用し、水力も同じで、これを国の何処か安全な場所に保管すれば完成である。

後は水道管や電線を繋げれば完全に国家として成り立つ。

魔法として使用する場合は？
スペルワード起源言語詠唱？を刻み紡ぐ必要があり、自然干渉を絶対とする。

シエロツール
〓 天鍵 〓

魔水晶破壊時に使用する『天より捧げられし鍵』。

魔水晶に触れるだけで破壊可能。

しかし、破壊時の衝撃は大きい為触れた瞬間に回避行動或いは防御行動を取る必要がある。

Ⅱ 術式解放Ⅱ

法術（完全に決められた方式からの術式解放）や連術（連続での術式解放）時に行われる連続魔法。

問題点としては放つたびに莫大な魔力を消費する事でもある。

Ⅱ エアエリック ツヴァイ ドラグーン 尾鰭引く双魚の刃Ⅱ

空中行動を行える部隊のみに告げられる命令。

空中からの攻撃を加えつつ地上への進軍をすると言う同時並行時に使用される。

が、まずは空中からの攻撃中に攻撃を喰らい、ワイバーングリフォン飛龍や鳥龍達が混乱を起こした時点で失敗となる為、一人囲を必要とする。

その場合、最も戦場で最前線を駆け抜け抜ける人物が適材適所される。

レヴォイト・ディレストラクチャー

Ⅱ 革命軍Ⅱ

奴隷制度、人種差別などと言う人権に背いた制度や武力、決まり事、規定に対する反乱組織。

一組4名で構成され、必ず一組に一人は部隊自体を仕切る事の出来る人物を取り入れる。

魔法、遠距離、近距離、空中部隊でそれぞれ別れる為、仕切るには相当な人材が必要である。

スカレット・クロス

Ⅱ 紅十字Ⅱ

反帝国組織団体。

壊滅された村の人間、街、町の人間達が集まって創られた特殊部隊。人数は相応で、数百人程度でもある。『帝国に聳える巨大な十字を真紅に染め上げる』と言う事から名付いたと言う。

遠距離と魔法に優れており、近接は余り優れているとも劣っているとも言えない物がある。

ソード・オブライト レフト・オブシールド
〃 右手に剣・左手に盾 〃

王国帝国の公認組織。

主に王国帝国皇国の治安維持、政治経済へ役立つ為の行動を起こす事が仕事。

年齢は10代から40代まで存在し、その年齢層の幅広さは通常の騎士団隊を優に超す。

歴代騎士団長は皆戦場で散ったと言いが、第19代目騎士団長である？リケア〃イーヴォンバツ？は必ず戦場へ生きて帰ってくる？不死身？と呼ばれる男である。

第00話 過去と悪夢と（前書き）

さて……、何度俺はブッチされれば良いんでしょうか？
それではちょっと泣きそうですけどどうぞ

第00話 過去と悪夢と

噎せ返る様な血の臭いが鼻孔を突いた。

身を焦がす程の灼熱の熱波が、濛濛と立ち上がる黒煙を巻き上げ、天へと滅する。

先程まで藍色で、感嘆する程美しかった夜空が一瞬にして、黒と紅蓮に支配される。

「クツ……あ、はははっ、……あ、ハハハハハハハハハハ……、くつ……、はは、はははははハハハハハハハハハハッ！！」

その場を支配するのは、色だけでは無い。

臭いも勿論の事ながら、その狂喜染みた嗤い声もまた、その醜悪な空間を支配した。

左腕は既に肩から下が失われ、頬にもまた痛々しい程の斬り傷が刻まれ、嗤う度、その腕の傷跡と頬から鮮血が零れ伝い落ちる。

落ちた先には、柔らかな、それこそ血の気を失った青白い人の肌があつた。

腕の中で、彼女は眠った。

抱かれる様にして、眠る様に、それこそ眠りの森の美女とでも言う様に、眠る様に逝った。

血は彼女へと零れる度に、その白い肌を伝い、纏っている衣類へと流れ、紅色に染め上げる。

嗤うだけ嗤った後、少年の狂乱の嗤いは止まった。

ぐらっ、と瞬間、世界が揺れた。嗤っていた時とは違い、意識が切り離され様としているのか、膝が笑い、腰が竦み、全身が悲鳴を上げる。

「……あ……—」

少年はそのまま重力に身を任せ、彼女を抱いたまま地面に倒れ伏せた。

それこそ、彼女を庇う様に、己の背から。

「……、あ、ぐ……、ッ、……、は、あ……—」

肩が揺れる度に、胸が競り上がり、口から息が吐かれる。

吐く度に香る血の香りは、鼻を塞ぎたくなるほどの物。

倒れた衝撃で腕から更に、おびただ夥しい量の命を司る心の臓へと送り届けられるハズの泉の液体が流れ出ていく。

身に纏っている、最高の職人による最高質の黒いコートも途切れ、破れ、千切れ——ボロ雑巾の様になっている。

中に着込んでいるシャツもまた、繊維が細かく、雑魚からの攻撃なら防御出来るのだが、今回ばかりは無理だった。右胸、左脇腹に銃創があり、其処から液体が零れ出ている。

致死的傷の量、死ぬとすれば死因は多量出血。

闇夜の空の如く黒い長い、肩くらいまである髪も紅と灰に汚れ、幼さを残すその顔もまた血化粧ちげしやうが成されている。

嗚呼——俺、死ぬんだな。

其処で少年は自覚する。

此処での約一年半の人生、楽しくもあり、悲しくも有った。

後悔は——あった。

後悔しているからこそ、言葉が浮かばない。

後悔しているからこそ、嗤ってしまふ。

嗚呼——護れなかった。

それが一番の後悔。

必ず護ると言ったのに、将来結婚しよう、約束したのに、護れなかった。

「嗚呼、……ああああ……」

オマエジャダレモマモレナイ。

剎那、その言葉が脳裏を横切った。
全身が痙攣する。

オマエハクソクモマモレナイ。

声が震える。

背筋に悪寒が走る。

オマエハ——ムノウダ。

「アアアアアア嗚呼あああああああああああああああ
あああああああツツツ！！！！！」

獸の如き絶叫。

阿鼻叫喚の如き狂つた叫び声が木霊する。

空は何も答えてはくれない。

彼女は何も答えてはくれない。

「少年、じゃあ僕が救って上げるよ」

誰かが答えてくれた。

分からない。
顔が見えない。

「僕の名前は——でね、君を救って上げる為に此処に来たんだ」

誰だ。

怖い。

救う。

大丈夫。

「あーあ、こんなにやられちゃったんだ。でも大丈夫、君はまだ生きられる。

僕が君に能力を上げるよ。そして一つの宝具もね」

「あ、ああ……、宝、具……、能、……力……ッ、……あ？」

「そうだよ、君の能力は今見た所『エアスベア・イゲジライト時空転移』だけみたいだからね。宝具も『サウンスライズ・エラキライザー千器流星』。武器具現化だけが、良くこれだけで頑張ったね」

「何故、……ッ、それ、を……？」

「だって僕は——だもん、当たり前さ。で、僕が上げる能力は一つ、それはね——」

其処で意識は途切れた。

暗い、暗い闇の中に……。

「……」

目を覚ますと、何時も通りの屋敷だった。

時間はまだ5時45分。

まだ彼女達も起きて来ない時間だ。

「……、夢、にしちゃあ……、悪趣味過ぎるぜ……」

俺は再び寝転び、天井を見上げる。

確か今日は快晴と？ウェザースター・オブサーヴァー天統観測師？が言っていた。

そりゃあ、洗濯物日和だ。

改めて、俺はそう思った。

第01話 疲労困憊な主人

天翔馬の月、朝12時33分33秒。

日本ならば暦上季節は冬。

やはりこの世界は日本がベースになっているのだろうか？

「これで三度目の冬になるけど……、慣れないもんだなあ」

やれやれ、と肩を竦めてから、俺は視線を書類に戻した。

窓の外では煌々と太陽が輝いている様だが、それでもヒューヒューと唸りを上げて吹いている空っ風が寒さを如実に俺に伝えている。この世界に来て、三年。

三年前の俺は脆弱、貧弱だった。

恐怖で足が竦んで、動けない時もあった。

膝が笑って、戦えない時もあった。

護れなくて、泣いた時もあった。

泣いて、喚いて、叫んで、嗤った。

だからこそ、もう二度と失わない為に、俺は戦う。

大事な物を、大切な人達をもう二度と、失わない様に。

一休憩として書類の束を机に置き、椅子を傾け、体を伸ばした。

背骨が伸びて行く感覚が、手に取る様にして分かる。

「流石に朝8時から6時間ぶっ通しは辛い物があるな……、あー、肩凝ったー」

肩に手を当てて回しながら、やれやれと溜め息を吐いた。後で湿布貼って置く。

椅子を傾け、前足を浮かせたまま天井を見詰めていれば、部屋の扉が二度、コンコンとノックされた。

規則的で、乱れの無い、隙の無い正しいノックの音。

「空いてるぞ？」

「はい」

そしてこの凜とした声、ビンゴ。

「こんな時間にどうしたんだ？ エリイ」

エルシア「オーキッドムーヴ。エリイ、と言うのはエルシアから取って付けた、俺なりの愛称だ。よひかた

淡い紫混じりの銀色の髪に、風で揺れる度に完全に姿を現すその紫色の双眸はまるでラピスラズリの如き美しさを持っている。

何事も見透かす様なその瞳と、性格に惚れて俺は彼女を雇った。

俺とエリイの出逢いは約1年と5ヶ月前。

俺が？黒獅白鷲戦争？で？黒獅子？ルシアの称号を得てから、約1ヵ月後の話だ。

元々エリイは、既に壊滅して姿形は無いのだが、クライフと言う村の村長の娘だったのだ。だが、上げた通り、壊滅の影響で身売りをする事となった彼女はまあ言ってしまうえば危うく犯される所だったのだ。

下劣克下種。ハーフ・アニエス半獣人と呼ばれる人種の中でも最も性欲の強い豚科の奴等にね。

で、見ていらなかったと言うか、気持ち悪さからついその豚達を蹴り飛ばしちゃいまして、彼女を救出。結果が今に至る。

彼女の首には未だに痛々しい程に、解除はしたのだが首輪の痕が残されている。俺はその痕を見る度に、後悔の念が生まれる。

もっと早く助けていれば、そもそも村が壊滅される前に帝国を何とかしていれば――。何度焦燥に駆られ、何度自己嫌悪に浸り、何度落ちぶれたか。

結果として彼女は無事だが、それでも何故だか未だに自分の事が許せない自分も居た。

まあその後、俺は彼女と『コンティブ・フラクティ血盟契約』を結び、主従関係に至っているのだが……、へ？嫌なのかって？

全然、むしろ惚れたからこそ結んだ。何か問題でも？

首を傾げる俺にエリイは頷いてから「御昼の準備が整いましたの

で、呼びに参いました」と淡々と答えた。

「ん、分かった。それじゃあ午前の仕事は此処までにして、昼にしようか」

応じれば俺は承認し終えた書類に重石を乗せ、固定してから淡い藍色の、それこそ薄手のジャケットを身に纏った。

確かに冬だが、屋敷内はこれで十分過ぎる。

「はい」

微笑み頷き、先に行こうとするエリイに俺は「オイオイ、一緒に行かないのか？」と尋ね掛けて見る。

「え、あの……、良いんですか……？」

良いんですかって、この子は……、そろそろ慣れようよ、俺もだけどさ。

「良いんだよ、てかこれは命令。一緒に来い、良いな」

数秒彼女は呆けてから、嬉しそうに笑みを零して「はいっ」と頷いてくれた。

俺達の暮らしている此処、シャンカティア半島は、東方国家群の中でも最も面積の狭い領土である。

それは当たり前だろう、半島なのだから。それこそバルカン半島程度しかない。

其処に古惚けてはいないが、立派と言えば立派な、俺達の暮らしている屋敷が建っている。

屋敷は最高の職人達に造らせた為に、耐震強度、魔物の侵入、外部攻撃は無効化可能である。

まあ流石に軍神の攻撃は防げないけどね、その時は俺が防ぐさ、無理だけど。

赤絨毯の敷かれた廊下を抜ければ、食堂室は直ぐだ。

「それよりご主人様」

「ん？ 何だ？」

駄弁りながら歩いていると、不意にエリィが顔を此方に向けて首を傾げて来た。

「ご主人様は胸は大きい方が好みですか？」

「……」

あるえ、可笑しいな……、幻聴が聞こえたよ？
（ロイン・コカイン・まやく）
心天国後地獄何て俺、飲んでないよ？ 可笑しいな。

「ご、ご主人様……？」

「ッハ？！ あ、嗚呼、悪い悪い、ちょっと死神が手招きして来たから追い返してた。
で？ 何だっけか？」

リピート、アフターミー？

「あ、はいっ、その、ご主人様は胸は大きい方が好みでしょうか？」

……。

読者諸君、どうやら今のは現実だったらしいぞ。

何だって？ 胸？

不意に彼女へと視線を送れば、彼女は何故か俺の方をチラチラと見ながら、自分の胸を見ている。

……、これは何て答えたら良いんだろう。

回答募集中、良し、決定。

「小さいのも嫌いじゃあないが、大きいのも嫌いじゃあない。むしろどちら也喜欢です、はい」

完全逃げの回答。

いや、地雷は踏みたくないからね。

その答えにエリイは哑然としてから直ぐに顔を戻して微笑みを浮かべてから「そうですか」と呟いた後に「分かりました」と頷いた。

「ん、それじゃあ昼だ、昼。行くぞ、エリイ」

「あ、はいっ」

一体どうしてこんな事を聞いて来たのだろうか？

ハッ！！ まさか胸で悩みが……、そうか、確かにこの世界には豆乳とか、キャベツとか、鶏肉とか言う一般的噂で聞く女性の胸を大きくする作用を持つ食材は無いからな。

あつたとしても全部モドキだからなあ……、この世界、案外不便だな、こう言う所は。

俺はウンウンと頷いて、胸の事が会話に含まれぬ様に気を配りながら食堂へと向かうのであった。

第02話 隠し切れない隠し事

食堂室は暖かい。

暖炉があるわけでは無いのに、まるで暖炉があるかのように暖かい。

理由を俺は、いや、俺達は知っている。

理由は至って簡潔で、厨房で火を使っているからだ。

厨房の温度はこのクソ寒い冬場でも夏初旬くらいまで上昇するのだから驚きだ。

ん、皆集まった様だな。それじゃあまあ、何時も通り――。

「さて、それじゃあ本日もまた美味そうな昼食を作ってくれた料理人達、そしてクレアに感謝して――」

『頂きます』

長い机に複数の椅子。それこそ多勢で客が来た場合に使用される居場所に腰掛けていた俺達は、俺の言葉に続いて合掌する。

大地の恵みに感謝しないとね。

「お、これ味付け変えたか？」

俺はミネストローネモドキに手を出して、よそつてから口に含んでみて味の変化があつたので尋ねて見る。

すると、俺の左前に座っている淡い緑色のショートヘアに、まるでエメラルドの如き美麗さを持つ碧眼をする、これぞ正しく妖精^{エルフ}と言う様に耳も長いクレア―ティア―フォームントに「嗚呼、変えたね」と応じられた。

「だよな、何か足したのか？」

再び口に運び含み、飲み込んでから投げ掛ける。

「お、其処まで分かったのかい？　なら自分で探しな、直ぐ分かるよ」

ククツと笑うクレアに俺は「そうだな、自分で探した方が確かに達成感あるし」と続けて頷いた。

彼女は基本ボーイツシユ克下手な男より男らしい性格の持ち主で、愛称もまた長いので『クレア』だが、実質名前の通り可愛い一面もある。

例えば彼女は爬虫類は平気なのに、虫が苦手だったり。後は妖精だから空を舞ってる時のあの笑顔とか。実に良いよね、ホント。

「ねね、そう言えばご主人様」

1人頷いていると、右隣に腰掛けている水色の髪をサイドテールで結っている、水色の瞳を持つリナリー「エブrendウールが俺の肩を二度叩いて来る。

「ん、どないした？」

口に含んでいた野菜を飲み込んでから、俺は首を傾げた。

「手伝って欲しい事があるんだよね、ど、暇でしょ？」

「暇でしょって俺を暇前提で言うな。一応溜まってた書類片付けをしている途中なんだ」

「よし、暇なんだね」

「人の話聞いてたかなあ!？」

何処までも理不尽な奴である。

だがそれでいて、優しく、温厚で、人当たりが良く、快活だからこそ慕われる。

研究熱心で、勉強家。そんな一面も持っている彼女に惚れた。故に俺は彼女を『リナ』と呼ぶ。

因みに俺は気に入った、惚れた女性以外愛称では呼ばない。精々名前程度だ。

愛称で呼ばれるのは光栄な事だぞ、分かったかね。

「ま、でも少しだけだからさ、良いでしょ？」

「まあ……、少しだけなら良いが……」

「やたつ、じゃあ食べた後私の部屋でねえっ」

「あ、嗚呼、わあった」

頷いて、1人食べ終えたりナはそそくさと食堂室を飛び出し、駆

け抜けて行く。

食後走ると胃、痛くなるぞー？

「全く、甘々ですにやあ、ご主人様は」

にゅふふと笑う俺の右前の銀色では無い、藍色混じりの灰色の長い髪に、藍色の瞳。特徴的な尾と耳を持つフィアレクス「ミーティア」。

アニシア 彼女は獣人の種族の猫科。故に耳と尾が弱点と言いついかにも猫らしい弱点を持っている。

無論、マタタビは禁止令が出ており、酒についても種類が限られて来る。

「そんなに甘いかあ？」

苦笑混じりに尋ねて見ると、彼女は笑いながら頷いて「甘々ですにやあ」と繰り返した。

「そうか……、でも厳しくって言ってもなあ……」

頬を掻きながら呟く俺に、左隣に腰掛けるエリイが微笑んで「其処まで厳しくならなくても……」と補足していた。

「ま、主様は怠けず働けて事だねえ」

「何処からそう繋がったんだよ……」

項垂れる俺にクククと不適に笑い続けるクレア。

「でも前よりは仕事してるぞ、これでも……」

「確かにそれは言えてますね。私達を雇ったばかりの時は動く事すらしませんでしたから」

未だに覚えていますよ、と溜め息を吐くエリイに俺は「オイオイオイ、溜め息は止めてくれよ」と言って置く。

「なら言われない様にするんだにやあ」

「おぐふ……、それは本日一番手痛い言葉だぞ、フィア」

食事を終えた俺は溜め息を吐いて、椅子を引いてから「それじゃありナの所でも行って来ようかね」と告げる。

「じゃあ私達もそれぞれの仕事に戻ると致しましょうか」

「ご主人様はリナが可愛いからって襲っちゃ駄目にやーよ？」

「主様ならやりかねないねえ」

「テメエ等俺をどう見てるんだ一体!？」

「「「ちよつと残念な人」」」
「しゅじんさま・あるじさま」

嗚呼、世界は理不尽だ。

精神面が傷付いた状態でリナの部屋に辿り着けば、扉を二度ノックする。

「あ、どーぞー」

「ん、お邪魔する」

雪崩れ込む様に俺は彼女の部屋へと入り、溜め息を吐く。

「ん? どないしたん、またエリイ達に何か言われたん?」

「何か以上の問題だよ。まさか揃いも揃って俺の評価は残念な人だったとは……」

「あははは、容赦無いなあ。良し良し」

俺の頭をぽむぽむと撫でるリナに微笑んで「有難う」と続けて「で、用事とは?」と尋ねる。

「そうそう」リナは頷いてそのアクアマリンの如き輝きを秘めた水色の瞳を俺に向けて「ご主人様、私達に何か隠してない?」そう尋ねて来たのである。

「何かとは?」

俺は一種の能力? ボーカーフェイス 仮初仮面? で普段と変わらない感じで対応するが、中身は案外驚いている。

気付かれていたのかね、これは。

「例えば能力についてとか」

「あはは、それはないない」

「ホント? 嘘はない?」

「……」

俺は額に手を当てて、仮初仮面を取り払ってから溜め息を吐いた。
「相変わらず、その目には弱いな、俺」

「初めて会った時もそうだったよね」

苦笑し合えば「で、隠してる事は？」と尋ねて来るリナに俺は口角を上げて「まずは」と続けた。

「俺の宝具の一つ？^{マスター・オブ・サーヴァント}主従関係？^{マスタ}なんだが、これの使い道が奴隷を増やす他にもあったと言う事に気付いた」

「へえ、どんな？」

あの輝きに満ちた目は、紛れ無き子供の目。新しい物、素晴らしい物、凄いい物を見た時の瞳だ。

俺はその瞳に見詰められながら頷き「主に従う者への魔力、及び、力の供給だ」と続けた。

「魔力供給？」

「嗚呼、俺に魔力は無い——が、^{ルル}？破戒全符？^{ルル・ブレイカー}で俺が魔力を持つていないと言う規定を壊せば良い。そうすれば俺に莫大な量の魔力が宿る」

「ちよい待ち、聞いても良い？」

「何だ？」

俺は彼女を見詰めたまま、言葉を待った。

「それ、下手すれば自殺行為だよな」

それから数十秒の間、この空間は静寂と沈黙に支配されていた。

第03話 後悔後先建たずとはこの事である

耳に痛い位の静寂と沈黙が部屋を支配する。

真剣なまでにその瞳で俺を見据え続けるリナに俺は瞳を閉じ、紡いだ。

「嗚呼、魔力が俺の保有量を超えれば自爆だ。無論、俺は死神に嫌われてるからな、死ねないけど」

肩を竦めて、やれやれ、と続けた後で「まあ、供給方法も考えないといけないし、問題は多々あるが」と頷いた。

「それ、本気で言ってるの……？」

俺は顔を下げたまま「嗚呼」とだけ答えた。

「そか……」

再び静寂。

沈黙。

時計の針だけが耳に痛い位に響く。

窓の外では空っ風が更に強く吹いているのが分かる。

「ねえ、ご主人様？」

其処で沈黙が破られた。

俺は顔を上げて「何だ？」と尋ねる。

「ご主人様は、私達を置いて……、死なないよね？」

それは、いつもの彼女からは信じられない程の弱気な発言だった。言葉には強さが無く、顔も何処か不安の色に満ちている。

良く見てみれば、肩も小刻みに震えている。

俺は頷いて、歩み寄ればそのまま彼女の肩に手を置いて引き寄せ、そのまま抱き締める。

「死なないよ、馬鹿だなあ。俺は死神に嫌われちゃってるんだから、死なないんだよ」

明るく、無理矢理だが苦笑を零して見せれば、リナは俺の背中に腕を回し、服をギュツと握っている。

「それに、俺がお前達を雇ったのに先に死ねるかよ。

まだ全然お前達の事知らないんだぜ？　それで死んだら馬鹿らしいだろう？」

だから死ねない、と言う訳ではない。

俺は、もう二度と大事な物、大切な人達を失いたくないのだ。だから死ねない。

俺のその言葉にリナは頷いてから「なら、良い」と囁いて、俺の胸に顔を埋めて来た。

「怖がらせたか……、悪かったな」

そつと、その水色の髪を梳く様に撫でていると、俺の腕の中で彼女は「いや、……私の方こそ。御免なさい」と、また掠れる様な声で囁いた。

俺は彼女をより強く、ギュツと抱き締めてやれば「リナ」と名前を呼ぶ。

すると彼女は顔を俺に向け「ん？」と首を傾げた。

「試してやってみようか……？　マスター・オブ・サーヴァント主従関係？　による魔力供給」

「わ、私でやるの？！」

「今丁度目の前に居るしな」

「ちょ、待つてよ。私制御出来るか分からないんだよ？！」

「その時はエリイ達に手伝って貰うさ」

まあ、制御不能状態になったら、の話だが。

多分なる事は無い。何故か、理由はこれまた簡潔で多量には供給しないからである。

「戒めを破れ、そして見届ける——？　ルール・ブレイカー破戒全符？」

突如、周囲に広がる青紫色の領域。

そして俺は告げる。

「俺の肉体に魔力が無い規定を破れ。無論、8分目まで宿れ」
其処で俺は意識を手放す。

何故か、……、はは、何かが焼き切れた様な、そんな感覚に襲われたからだよ。

「——ッ！——様っ！」

あれ、誰かに呼ばれてる……？

誰だ……、つて、雨か？

頬が濡れてる、……一体誰だ？

意識を掴んだ俺は瞳を微かながら開いた。

目の前には俺の上に馬乗り状態で叫んでいるフィアと、困う様に
して居るエリイや、クレア。

「ッ……、成功、した、みたいだな……」

俺はそう呟き、上半身を起こす。

「にやつ、ご、ご主人様っ、だ、大丈夫なのかにやあ……？」

倒れ掛かったフィアの背中に腕を置いて支えてやれば俺は微笑み
「嗚呼、平気」と頷いた。

と、俺の両肩に重みが加わった。

「エリイ……、つとと、クレアも、どした……？」

「何をしたんですかつー！！！」

「一体何をしたんだいつ、説明しなつー！！」

そのまま押し倒される形で再び寝かせられれば、完全に泣いた後の充血した目で叫ばれました。

説明つつたつて……、つと、そうだ……。

俺の腕を抑え、言葉を待つエリィ達に俺は尋ねた。

「リナは、居るか……？」

「リナリーさんなら、其処に……」

「其処？」

エリィとクレアに起こされれば、指差される。こらこら、人を指差すな、指を。

彼女達の指の先、蹲^{ひづ}まつたまま震えている彼女の姿があった。

「リナちゃんが私達を呼んでくれたんだにゃあ、良かったにゃ、ご主人様」

「リナ……、お前」

俺は苦笑をしてから「エリィ、クレア、手伝ってくれ」と続けた。

「手伝うつて、何をだい？」

首を捻るクレアに俺は「防御だ」と続けた。

「防御、ですか……？」

「嗚呼、俺はこれから、実際実験段階だが可能性は高い実験をやろうとしている。」

その実験内容が、下手をすれば、暴走させかねない。だから防御と制御を頼みたい」

身体を起こし、四つん這いになれば「出来るか？」と尋ねる。

「まあ夕食の準備までに終わらせてくれるなら手伝ってやるよ」

「私は大丈夫ですよ。では私が前衛で防御致しましょう。ファイアに制御は任せます」

「あいあいによーっ！」

三人の言葉が聞こえてくれば俺は頷き、リナへと歩み寄る。

「リナ……？」

「ご、主人、様……？」

「嗚呼、俺以外の誰に見得る？」

苦笑を浮かべてから、蹲る彼女をそっと引き寄せてやれば、冷え切った彼女の身体に笑みを零した。

「やっぱりな、と。」

「リナ、お前俺に魔力、注いだらう。体温調節の為に」

「ッ……」

「どう言う事ですか？」

リナを包み込む様に抱き締めてやってから、背後から投げ掛けられるエリイの問いに俺は「倒れた時、俺の身体は納まり切らない魔力を放出しようとして体温も同時に放出していたのさ。で、その体温が下がり切らないようにリナがずっと魔力で調節してくれてたってわけ」と説明した。

「成程、リナ、アンタ無茶するんじゃないよ。炎なら私の方が得意なんだから」

「それじゃあ体温調節前に焼死体になるわ」

「じゃあ私の魔法ならどうかにや？ 治癒系の召喚獣で治癒させるにや。体温調節まで治癒なら出来るしにや」

「嗚呼、それなら余裕だな」

と、言う事だ、と続けると後ろの三人は「成程」と頷いていた。で、

「リナ……、俺はもう大丈夫」

「ホント……？」

「嗚呼、本当。だがしかあし、問題発生。それはリナの魔力さ」

「私、の……？」

首を傾げる彼女に俺は頷いて「俺の体温調節の為に魔力、使ったからもう残ってないだろう」と尋ねて見る。

「うっ、そ、それは確かに……、何だか身体、軽い感じがするし……」

「完全に魔力不足だな。と、言う事で俺が魔力を注いでやろう」

「へ……？」

「なあに怖がる事は無い。後ろにはエリイ達が居る、暴走したとしても抑えてくれるさ」

「で、でも——ッッ!?!」

言い切る前に、その淡い桃色の唇を己の唇で塞ぐ。

それこそ長時間やれば魔力も多量、短時間なら少量と言った類。

唇が重なっている間、彼女はその震える手で俺の体に縋る様にして抱き着いている。

そろそろ良いかな、そう思った俺は、そつと唇を離してやる。

ほう、と彼女の口から何処か色っぽい吐息が漏れた。

刹那、其処で俺は気付いた。

彼女の魔力量が、可らしい、と。

俺は此処で後悔する。

魔力、抜き方ってどうするんだっけ？ と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9265y/>

Re:Act—創造者な俺の異世界記録—

2011年11月28日02時01分発行